

厚生労働科学研究費補助金（化学物質リスク研究事業）

エクソソーム RNA を毒性指標とした
次世代型催奇形性評価法の開発に資する研究
(21KD1001)

令和 5 年度 分担研究報告書

分担研究課題：オルガノイド由来エクソソームによる毒性評価

研究分担者 成瀬美衣
国立がん研究センター・研究所・動物実験施設・研究員

研究協力者：野崎弘枝 国立がん研究センター・研究所・動物実験施設

研究要旨

科学技術の進展に伴い年々増加する新規化学物質の安全性確保は極めて重要な課題であり、それらの生体影響の評価には、毒性機序の解明が必須とされるが、特に、生殖発生毒性学の分野は他の毒性分野よりもメカニズム解析が遅れている。評価方法が経験値に依存する由縁でもある。

我々は、これまでに、細胞間情報伝達の 1 つとして細胞から分泌される小胞であるエクソソーム中に含まれる RNA を指標とした迅速かつ高感度な次世代型毒性試験法の開発を、厚労科研・化学物質リスク事業（H30-R2 年度）において行い、成獣雄マウスに対して、血液 1 滴から全身の病理組織学的診断を検出する高感度な系の確立に成功している (Ono R. et al., Toxicology Reports 2020)。

本研究においては、エクソソーム RNA を腹単位の毒性指標とする次世代型催奇形性評価法の開発を行うことで、これまでの経験重視に依存していた催奇形性の評価をメカニズムに基づいた安全性評価にステップアップし、リスク評価時に常に一定の判断基準による評価が可能となることで、催奇形性作用を持つ化合物の迅速化、高感度化した評価を可能とすることを目的としている。

また、本研究においては、胎盤形成異常や、神経形成異常、代謝異常、免疫異常などの表現型を持つ遺伝子改変マウスを利用することで、催奇形性に関連する各表現型に対応したバイオマーカーとなるエクソソーム RNA を単離することも目的としている。そこから得られたバイオマーカーにより、未知の催奇形性物質に対しても、催奇形性を評価することが可能になる。さらに、エクソソーム RNA を毒性指標とする評価法がオルガノイド 3D 培養法における培養上清中のエクソソームにも応用が可能な検証を行なうことで、将来的な新規の動物実験代替法の開発に資する研究も行う。

3 年計画の初年目にあたる令和 3 年度の本分担研究の進捗は以下の通りである。

・オルガノイド 3D 培養法を利用した代替法の検討のために、マウスの肺、肝臓、大腸よりオルガノイドの樹立することに成功した。

3 年計画の 2 年目にあたる令和 4 年度の進捗は以下の通りである。

・肝臓オルガノイドを細胞培養プレートに播種し、5 日間培養した後、アセトアミノフェン (0mM、5mM、10mM、20mM、40mM) を添加した。アセトアミノフェン添加後の 2 日目に培養上清と肝臓オルガノイドを回収した。

24 時間までの観察では、5mM および 10mM のアセトアミノフェン添加では、細胞の生存性は溶媒コントロールや無添加コントロール群と変化しなかった。しかし、48 時間後には 5mM 投与群でも細胞の生存性が著しく低下していることが観察されました。

また、肝臓障害の指標である血液中の逸脱酵素 (AST および ALT) もアセトアミノフェン添加後の 48 時間の培養上清で測定し、動物実験と同様の傾向が確認された。

3 年計画の 3 年目にあたる令和 5 年度の進捗は以下の通りである。

・ 肝臓オルガノイドを細胞培養プレートに播種し、5日間培養した後、肝毒性モデル物質である四塩化炭素（0mM、0.3mM、1mM、3mM、10mM）を添加した。四塩化炭素添加後の2日目に培養上清と肝臓オルガノイドを回収した。容量依存的に、肝臓オルガノイドに細胞死が見られた一方、肝臓オルガノイドの培養上清中の逸脱酵素（ASTおよびALT）においては、生体マウスに四塩化炭素を投与した時と同様の著しい値の上昇は確認できなかった。また、肝臓オルガノイドの培養上清中のエクソソームRNA解析を行なったところ、肝障害のバイオマーカーであるmiR-122やmiR-192の上昇も確認できなかった。

A. 研究目的

化学物質の有害性評価、特に化審法におけるヒト健康影響に関する有害性において、化学物質の生殖発生への影響を迅速かつ正確に評価することは最重要課題の一つである。現行の生殖発生毒性試験法は、莫大な費用、時間や労力以外に、観察者の経験に依存する部分や、得られる判定基準が必ずしも施設間で一定とは言えない部分がある。

その内の1つである胚・胎児発生に関する試験（発生毒性試験）では、母毒性評価とともに胎児形態観察（外表、内臓および骨格観察）から催奇形性を評価する。その際に、腹内・腹間の感受性に差がある中で、形態変化を異常か変異に分類し、その発現率から催奇形性を判断する事は困難な場合がある。

近年、細胞間情報伝達の1つとして、細胞から分泌される小胞であるエクソソームが注目されている。エクソソームは体液中（血液、髄液など）を循環し、細胞特異的なマイクロRNAを内包することから、研究分担者の東京医大・落谷らは、腫瘍細胞に特異的なマイクロRNAを指標にした、血液1滴による13種類の早期がん診断法（精度95%以上）を開発した経験を持つ。

我々は、エクソソームRNAを指標とした迅速かつ高感度な次世代型毒性試験法の開発を、厚労科研・化学物質リスク事業（H30-R2年度）において行い、成獣雄マウスに対して、血液1滴から全身の病理組織学的診断を検出する高感度な系の確立に成功している（[Ono R. et al., Toxicology Reports 2020](#)）。

本研究は、これまでの実績、経験を活かし、エクソソームRNAを指標にした次世代型の催奇形性評価法の確立と催奇形性の発現メカニズムの解明を目的とする。

エクソソーム中に多く内包されることが知られるマイクロRNAが催奇形性に寄与している報告もあることから、本研究の特徴は、エクソソームRNAを指標することで、リスク評価時に常に一定の判断基準による評価が可能な次世代型催奇形性評価法を開発

すると同時に、生殖発生毒性のメカニズムの解明にも繋がることである。

令和3年度に確立した試料採取法に基づいて、令和4年度には催奇形性陽性対照物質であるバルプロ酸投与後の母動物血清および子宮内容物（胎盤、卵黄嚢膜、胎児）をエクソソーム解析用に採取することを行なっている。今年度は、昨年度に採取したサンプルの詳細な解析を行い、催奇形性の毒性指標となるエクソソームRNAの単離を行う。

また、胎盤形成異常や、神経形成異常、代謝異常、免疫異常などの表現型を持つ遺伝子改変マウスを利用することで、催奇形性に関連する各表現型に対応したバイオマーカーとなるエクソソームRNAを単離することも目的としている。そこから得られたバイオマーカーにより、未知の催奇形性物質に対しても、催奇形性を評価することが可能になる。

さらに、エクソソームRNAを毒性指標とした動物実験に依存しないオルガノイド3D培養法を利用した次世代型代替法の開発も視野に入れている。オルガノイドは、臓器を構成する能力を持った未分化な組織幹・前駆細胞が、3D培養環境の中で形態形成過程の特徴を模倣してミニ臓器が形成されるものであり、発生期の模倣モデルとして、化学物質や薬物による毒性影響の評価にも適用できると考えられる。

そこで、オルガノイド由来のエクソソームにおいても毒性評価が可能かを明らかにすることも目的としている。これは、動物福祉（3Rs）の観点による代替法への応用を考慮した取組の一環である。具体的には、オルガノイドの培養上清中のエクソソームが*in vivo*のエクソソームと同様に毒性バイオマーカーとなりうるのかの検証を行う。

B. 研究方法

本研究においては、毒性発現メカニズムを考慮した次世代型の生殖発生毒性評価法を確立することを目的に、以下の概要を行う。

● エクソソームRNAを腹単位の毒性指標とする次

世代型催奇形性評価法を開発するために、妊娠マウスに既知の催奇形性化合物を経口投与し、胎児に発現する形態変化から毒性指標となるエクソソーム RNA の同定を次世代シーケンス解析により行う。

● *in vivo* の特性を高度に保存した *in vitro* モデルとされるオルガノイド 3D 培養法の培養上清中に細胞より分泌されるエクソソームを毒性指標として利用可能かを検討し、動物実験によらない次世代型代替法の開発を行う。

これらに加えて、対象マウス個体の一般的な毒性評価を行うことで、現行の生殖毒性評価と本研究で開発する次世代型生殖毒性評価法の比較を行う。

国立医薬品食品衛生研究所・安全性生物試験研究センターにおいては、化学物質のマウスへの投与実験および採血および胎児観察（桑形）、化学物質の用量設定実験および病理組織学的検査・生化学検査（平林）、エクソソームの抽出およびエクソソーム RNA の次世代シーケンサーによる網羅的解析（小野）を行い、東京医科大学・医学総合研究所・分子細胞治療研究部門においては、催奇形性のバイオマーカー候補の探索およびその詳細の解析（落谷）を行い、大阪大学・微生物病研究所（伊川）においては、本研究において得られる発生ステージに特異的なマイクロ RNA の変異マウスの作製、および催奇形性解析に適したモデルマウスの作製（伊川）を行う。また、国立がん研究センター（成瀬）においては、毒性バイオマーカーであるエクソソーム RNA が、オルガノイド 3D 培養上清中に細胞より分泌されるエクソソームにおいても毒性指標となるのかを検討する。

・マウス血液からのエクソソーム RNA 単離（

国立医薬品食品衛生研究所において採取された血液サンプルを用いて、国立医薬品食品衛生研究所および東京医科大学・分子細胞治療研究部門においてエクソソームの単離を行う。具体的には、超遠心ペレットダウン法を行い、エクソソーム単離後は、Nanosight またはエクソソームの表面抗原に対するウエスタンブロットティングやエクソスクリーン法により、単離されたエクソソームの大きさと分布、数のカウントを行い、エクソソーム単離効率の評価を行う。

・マウスを用いたバルプロ酸ナトリウム経口投与による母動物血清中並びに胎児及びその附属物中エクソソームの解析のための試料採取法

催奇形性陽性対照物質として二分脊椎や無脳症、脳瘤などの神経管閉鎖障害を誘発するバルプロ酸を用

いた。バルプロ酸は抗てんかん薬として使用されている。

本研究では、マウスの神経管閉鎖時期である妊娠9日から11日にバルプロ酸を経口投与し、投与最終日（妊娠11日）、これまでにエクソソーム解析実績のある妊娠15日、および催奇形性評価に選択されている妊娠20日に、それぞれ、母動物血漿および子宮内容物（胎盤、卵黄嚢膜、胎児）をエクソソーム解析用に採取した。

また、曝露状態を確認するために、母動物および胎児中のバルプロ酸濃度を確認した。

1. 共通事項

1-1. 被験物質

測定対象物質：バルプロ酸ナトリウム

製造元：Sigma-Aldrich Japan G.K.

CAS番号：1069-66-5

分子量：166.19

ロット番号：WXBD4552V

純度：99.0%

性状：白色、粉末

保管条件：密栓、冷暗所

1-2. 媒体

名称：0.5 w/v%メチルセルロース溶液（略称：0.5% MC溶液）

製造元：富士フィルム和光純薬株式会社

ロット番号：CAE0466

媒体の調製

必要量のメチルセルロースを秤取し、攪拌しながら温めた注射用水（日本薬局方、株式会社大塚製薬工場、ロット番号1J76）に徐々に加えて分散させた。これを冷やしてメチルセルロースを溶解させ、更に注射用水を加えて0.5%MC溶液とした。調製後、冷蔵保存した。

1-3. 被験液の分析

18.75 mg/mL (300 mg/kg群) および37.5 mg/mL (600 mg/kg) の被験液について、媒体中濃度を測定した。各被験液の濃度の表示値に対する割合は100.0%及び102.2%であり、いずれも許容範囲内（濃度：表示値に対する割合が100% ± 10%）であった。

測定施設：一般財団法人日本食品分析センター

1-4. 使用動物

動物種：マウス（SPF）

系統：C57BL/6J

供給源：ジャクソン・ラボラトリー・ジャパン株式会社、厚木飼育センター

入荷時週齢：雌10週齢、雄11週齢

匹数：交配用雄82匹、雌92匹

使用した妊娠動物：46匹

入荷後1週間の検疫・馴化期間を経て、一般状態及び体重推移に異常のない動物を用いた。

交配：11週齢以上の雌1匹に12週齢以上の雄1匹を終夜同居させた。翌朝、膈内に膈栓が確認された雌を交尾成立動物とし、その日を妊娠0日とした。

群分け：交尾成立日（妊娠0日）ごとに行い、妊娠0日の体重を基に各群の体重が可能な限り均等となるようにコンピュータを用いたブロック化により行った。余剰動物は動物管理部門へ移管した。

1-5. 飼育環境

温度 (23 ± 3°C)、湿度 (50 ± 20%)、換気回数 (10~15回/時間)、照明 (1日12時間、07:00~19:00) に統御された動物飼育室で飼育した。飼育は床敷 (コンフィネスト、株式会社ファルマ) を入れたプラスチックケージ (W155×D245×H150 mm) に個別飼育した (交配期間を除く)。飼料は固型飼料CRF-1 (γ線滅菌、オリエンタル酵母工業株式会社) をステンレス製給餌器に入れて自由に摂取させ、給水は自動給水装置により自由に水道水を摂取させた。環境エンリッチメントとして、IACUCの指針に従って、ケージの蓋からステンレス棒を吊り下げて遊具とし、床敷と同じ素材のBiting board (3cm四方のプレートを中央で山折りにしたもの)を噛み材として与えた。

2. エクソソーム解析用試料採取試験

2-1. 投与経路、投与期間及び投与回数とそれらの選択理由

投与経路は臨床適用経路である経口投与を選択し、投与期間はバルプロン酸ナトリウムの催奇形作用の臨界期である妊娠9日より11日までの3日間とした。投与回数は反復投与試験で一般的に行われている1日1回 (計3回) とした。

2-2. 投与方法

投与方法は、げっ歯類の経口投与方法に際して一般的な強制経口投与とした。バルプロン酸ナトリウムは注射用水に5%濃度で溶解することが知られていることから、催奇形作用が明瞭に発現すると考えられる800 mg/kgを投与可能な16 mL/kgを投与容量とした。投与液は、フレキシブル胃ゾンデを用いて胃内に強制経口投与した (8:00~11:00の間)。動物ごとの投与液量 (表示単位: 0.01 mL) は投与当日の体重を基準に算出した。

2-3. 投与量及び群構成

投与量は300、600及び800 mg/kgの3用量とし、媒体対照群を含め試料採取時点を考慮した10群構成とした。すなわち、媒体対照群、300及び600 mg/kg群に妊娠11日剖検群、妊娠15日剖検群及び妊娠18日剖検群をそれぞれ設けた。また、800 mg/kg群には妊娠18日剖検群を設定した。剖検群ごとの交尾成立雌動物数を4匹 (800 mg/kgは死亡等を考慮し8匹) とした。群構成を表1に示した。ただし、媒体対照群、300及び600 mg/kg群に不妊が認められた場合は、適宜交尾成立動物を追加した (動物番号は各群5番以降を続けて割当てた)。

表1

投与量 (mg/kg)	剖検時期	投与容量 (mL/kg)	濃度 (ng/mL)	交尾成立雌数	動物番号
0	GD1	16	0	4	1101~1104

	1			4	2101~2106
	GD1				
	5				
300	GD1	16	18.75	4	4101~4107
	1				
	5				
600	GD1	16	37.5	4	7101~7106
	1				
	5				
800	GD1	16	50	8	10101~10108
	8				
	8				

投与量設定根拠

本被験物質の臨床適用量は成人1人当たり1日400~1200 mgである。基準体重を50 kgとすると、この量は8~24 mg/kgに相当する。バルプロ酸を妊娠初期に服用したヒトでは二分脊椎の他、心室中隔欠損等の心奇形や多指症、口蓋裂、尿道下裂などの外表奇形を持つ児が出現することが知られている。本試験においては、明確な影響量における母動物及び胎児のエクソソームの量や内容に対する影響を検討するため、臨床用量の13~75倍で、奇形を起こすとした文献が存在する300 mg/kg及び600 mg/kgを投与する群を設けた。なお、600 mg/kgの投与によっても奇形が認められない胎児が存在したため、800 mg/kgを追加した。

2-4. 動物の観察

全動物について、生死並びに体外表、栄養状態、姿勢、行動及び排泄物などの一般状態を観察した。観察は、投与期間中は1日3回、投与前、投与直後及び投与1~3時間後の間 (ただし、妊娠11日剖検群の妊娠11日は投与前、投与直後及び採血前の3回)、その他の期間は1日1回 (午前中) 行った。体重は、妊娠0、4、9、10、11、15、18日 (妊娠11日剖検群及び妊娠15日剖検群はそれぞれ妊娠11及び15日まで) の07:00~12:30の間 (投与期間中は投与前) に測定した。また、投与期間中 (妊娠9日から妊娠11日) の体重増加量を算出した。

2-5. 剖検

妊娠11日剖検群の各4~7例より、妊娠11日の投与後1時間の時点 (許容範囲60±5分) において、イソフルラン吸入麻酔下に無処置シリンジを用いて腹大動脈から可能な限り採血した後、腹大動脈を切断して放血により安楽死させ、体外表、胸腔内及び腹腔内の主要器官/組織を詳細に観察した。妊娠15日剖検群の各6例は妊娠15日の、妊娠18日剖検群の各5~6例 (800 mg/kg群は8例) は妊娠18日の、いずれも妊娠11日に採材した動物とほぼ同じ時刻 (09:00~12:00の間) に、同様に採血後放血して安楽死させ、剖検した。

2-6. 帝王切開及び母血清中エクソソーム解析用試料採取

剖検時に、着床の有無を肉眼的に観察して、妊娠の成否を確認した。妊娠が認められた母動物については、子宮内の生存胎児数、死亡胚・胎児数を判定・記録した。生存胎児と死亡胚・胎児の総数を着床数とした。

肉眼的に着床が認められない動物の子宮は、2%NaOH水溶液により透明化して着床部位の有無を観察した。着床部位が認められない動物は不妊と判断した。

2-7. 母動物血清中エクソソーム解析用試料の処理

血液をポリプロピレン製容器（タンパク低吸着）に移し、室温で30分以上放置した後、遠心分離（4℃、6000 ×g、2分間）により血清を得た。得られた血清試料は試験番号、試料採取時点、動物番号、試料番号、採血年月日、試料名を明記したラベルを貼付したタンパク低吸着チューブに入れ、測定時まで-80℃の冷凍庫（許容値：-70℃以下）に保存した。

2-8. 羊水、胎児血漿（GD18）、胎児（GD11、GD15）、胎盤の採取

1) 採取日及び採取時点

妊娠11日剖検群：各群4例

最終投与1時間後（09:00~12:00の間）

妊娠15日剖検群：各群4例、

妊娠11日帝王切開とほぼ同じ時刻

（09:00~12:00の間）

妊娠18日剖検群：各群4例（800 mg/kg群は8例）、

妊娠11日帝王切開とほぼ同じ時刻（09:00~12:00の間）

2) 対象部位（サンプル）の採取

(a) 妊娠11日剖検群

子宮壁を切開し、卵黄嚢膜に被包された胎児を摘出した。その後、生理食塩液を入れたシャーレ中等で卵黄嚢膜を切開し、胎児と胎盤を分離した。胎盤はほぼ均等に2分割し、それぞれRNA laterと10%リン酸緩衝ホルマリン液を満たした15 mLのコニカルチューブに保管した。胎児は10%リン酸緩衝ホルマリン液で固定後、形態観察を実施した。

(b) 妊娠15日剖検群

妊娠動物の子宮壁を切開後、卵黄嚢膜の外側から切開し、バリアチップで羊水をポリプロピレン製容器（タンパク低吸着）に採取した。羊水を採取した後、卵黄嚢膜に被包された胎児及び胎盤を摘出した。胎児と胎盤を分離し、個別に重量を記録した。胎盤はほぼ均等に2分割し、それぞれRNA laterと10%リン酸緩衝ホルマリン液を満たした15 mLのコニカルチューブに保管した。羊水は遠心分離（4℃、6000 ×g、2分間）後、上清をバリアチップでタンパク低吸着チューブに移した。胎児は10%リン酸緩衝ホルマリン液で固定後、特に神経管の閉鎖状態に注目し、形態観察を実施した。

(c) 妊娠18日剖検群

妊娠動物の子宮壁を切開し、卵黄嚢膜に被包された胎児を摘出後、胎児の頸部を切開して頸動脈を切断し、漏出した血液をヘパリン処理したヘマトクリット毛細管を用いて可能な限り採血した。血液はポリプロピレン製容器（タンパク低吸着）に移し、遠心分離（4℃、6000 ×g、2分間）により血漿とし、バリア

チップでタンパク低吸着チューブに移した。採血後の胎児は重量を記録し、10%リン酸緩衝ホルマリン液で固定後、特に神経管の閉鎖状態に注目し、形態観察を実施した。

また、胎盤は重量を記録後、ほぼ均等に2分割し、それぞれRNA laterと10%リン酸緩衝ホルマリン液を満たした15 mLのコニカルチューブに保管した。

3) 試料番号

羊水又は胎児血漿、胎盤及び胎児は、それぞれ試料番号を記載したものをラベルしたサンプル管に収納した。試料番号は、着床番号と内容物を示す番号をハイフンで繋ぎ表示した。着床番号は以下の表2に従って1生存胎児ごとに割り振った。

表2

投与量 (mg/kg)	剖検時期	着床番号
0	GD11	101~
	GD15	201~
	GD18	301~
300	GD11	401~
	GD15	501~
	GD18	601~
600	GD11	701~
	GD15	801~
	GD18	901~
800	GD18	1001~

着床番号、ハイフンに続けて示す内容物は、サンプル管内の試料の種類を1桁の数字で示した。

すなわち、-1は羊水又は胎児血漿、-2は胎児、-3は胎盤（RNA later）、-4は胎盤と識別した。

サンプル	枝番号	保存条件
羊水又は胎児血漿	-1	冷凍（-80℃）
胎児	-2	室温
胎盤（RNA later）	-3	冷蔵
胎盤（10%リン酸緩衝ホルマリン液）	-4	室温

2-8. 統計処理

・MiTOX-BOZOシステム（Version 9.3.1.1、三井E&Sシステム技研株式会社）

3. バルプロ酸経口投与後の母動物血漿中および子宮内容物中の濃度確認

バルプロ酸をその奇形の臨界期（妊娠9~11日まで）の妊娠雌動物に投与し、胚・胎児発生への有害作用を起こした状況での、母動物血漿中並びにその胎児中のバルプロ酸濃度を測定することにより、被験物質の妊娠動物における曝露状況を評価した。

3-1. 投与経路、投与期間及び投与回数とそれらの選択理由

2. エクソソーム解析用試験と同様（2-1.参照）

3-2. 投与方法

2. エクソソーム解析用試験と同様（2-2.参照）

3-3. 投与量及び群構成

投与量は300及び600 mg/kgの2群構成とした。1群当たりの交尾成立雌動物数を5匹とした。群構成を表3に示した。

表3

投与量 (mg/kg)	濃度 (mg/mL)	投与容量 (mL/kg)	交尾成立雌数	動物番号
300	18.75	16	5	1101~1105
600	37.5	16	5	2101~2105

3-4. 投与量設定根拠

被験物質の臨床適用量は1日400~1200 mgである。基準体重を50 kgとすると、この量は8~24 mg/kgに相当する。この量のバルプロ酸を妊娠初期に服用したヒトでは二分脊椎の他、心室中隔欠損等の心奇形や多指症、口蓋裂、尿道下裂などの外表奇形を持つ児が出現することが知られている。

Dawning et al. (注1)によれば、800 mg/kg又は400 mg/kgのバルプロ酸を妊娠9日(膣栓=妊娠0日)の昼に単回腹腔内投与した結果、脊椎、肋骨及び指の奇形が報告されている。本試験においては、当初、明確な影響量における母動物及び胎児のエクソゾームの量や内容に対する影響を検討するため、臨床用量の16~100倍で、全胎児に奇形を起こすとした文献が存在する400 mg/kg及び800 mg/kgを投与する群を設けた。実際に投与を行うと、800 mg/kgでは初回投与で母動物が死亡し、この用量では必要なTK試料数の確保が難しいと想定されたことから、投与量を600及び300 mg/kgに変更した。

(注1) Downing Chris, Biers Jami, Larson Colin, Kimball Alexi, Wright Hali, Ishii Takamasa, Gilliam David, Johnson Thomas: Genetic and Maternal Effects on Valproic Acid Teratogenesis in C57BL/6J and DBA/2J Mice. Toxicological Sciences. 116 (2) 632-639 (2010).

3-5. 動物の観察

生死並びに体外表、栄養状態、姿勢、行動及び排泄物などの一般状態を観察した。観察は、投与期間中は1日3回、投与前、投与直後及び投与1~3時間後の間(ただし、妊娠11日は投与前、投与直後及び採血前の3回)、その他の期間は1日1回(午前中)行った。

体重は妊娠0、4、9、10、11日の07:00~12:30の間(投与期間中は投与前)に測定した。

なお、800 mg/kgを投与した1例の死亡動物は、搬出前に測定した結果、著しい重量低下は認められなかった。

3-6. 剖検及び帝王切開

妊娠11日の投与後1時間の時点(許容範囲60±5分)

機器名及び型式	メーカー
四重極タンデム型質量分析計 (MS/MS)	Waters Corporation
データ処理ソフト MassLynx 4.1	Waters Corporation
高速液体クロマトグラフ (HPLC) ACQUITY UPLC I-CLASS	Waters Corporation

において、イソフルラン吸入麻酔下にて、ヘパリンナトリウム処理シリンジを用いて腹大動脈から可能な限り採血(剖検時間の偏りを考慮し、低用量群と高用

量群を交互に採血した)した後、腹大動脈を切断し放血により安楽死させ、体外表、胸腔内及び腹腔内の主要器官/組織を詳細に観察した。

また、800 mg/kgを投与した1例の死亡動物は、発見後速やかに、剖検を行ったが、特記すべき異常は認められなかった。本例では死亡に先立つ一般状態の異常も観察されなかった。800 mg/kgを投与し死亡した1例の一般状態観察、体重測定、剖検所見については本試験の結果から、削除した。

剖検時に、着床の有無を肉眼的に観察して、妊娠の成否を確認した。妊娠が認められた母動物については、子宮内の生存胎児数、死亡胚・胎児数を判定・記録した。生存胎児と死亡胚・胎児の総数を着床数とした。肉眼的に着床が認められない動物の子宮は、2%NaOH水溶液により透明化して着床部位の有無を観察した。着床部位が認められない動物は不妊と判断した。母動物ごとに妊娠状態を記録し、第6.1.3項で採血し、第6.1.5項に従って処理した血漿とともに試験場所に送付した。肉眼的に着床が認められない動物の子宮は観察後廃棄し、TK試料は測定対象としなかった。

3-7. 母動物血漿中濃度測定用試料の処理

血液をポリプロピレン製容器に移し、遠心分離(4℃、6000 ×g、2分間)により血漿を得た。得られた血漿試料は試験番号、採血時期、動物番号、試料番号、採血年月日、採血時点、試料名を明記したラベルを貼付したポリプロピレン製容器に入れ、測定時まで-80℃の冷凍庫(許容値:-70℃以下)に保存した。

3-8. 胎児の採取

1) 採取日及び採取時点

妊娠11日:各群5例、最終投与1時間後

2) 対象部位の採取

子宮壁を切開後、卵黄嚢膜と胎児及び胎盤を摘出し分離した。

胎児はそれぞれ試料番号をラベルしたサンプル管に個別に収納し、重量を記録した。

3) 試料番号

試料番号は、着床番号と内容物を示す番号をハイフンで繋ぎ表示した。

着床番号は、300 mg/kg群は201番から、600 mg/kg群は301番から1生存胎児ごとに割り振った。

着床番号、ハイフンに続けて示す内容物は、サンプル管内の試料の種類を1桁の数字で示した。すなわち、1は胎児がサンプル管の内容であった。

4) サンプルの保管

全てのサンプル管は測定まで-80℃の冷凍庫(許容値:-70℃以下)に保存した。

3-9. 母動物血漿中濃度及び胎児中濃度測定

分析は株式会社ボゾリサーチセンターつくば研究所に委託した。

測定対象試料は、各群、各時点の妊娠成立動物のうち個体番号が若い3例から得られたTK試料を測定対象とした。

分析方法:

液体クロマトグラフ-タンデム質量分析(LC-MS/MS)法

測定対象物質:バルプロ酸

標準物質:valproic acid sodium salt

ロット番号 : WXBD4552V
塩換算係数 : 0.8677 (=144.21/166.19)
内標準物質 : Diclofenac sodium salt
ロット番号 : P7E3B

なお、簡易分析バリデーションは昨年度 (R3年度) に実施している。

・エクソソーム RNA 網羅的遺伝子発現解析

国立医薬品食品衛生研究所において採取された血液サンプルより抽出されたエクソソームは、Qiazol solution (Qiagen) によって溶解され、miRNeasy micro-elution kit (Qiagen) によって、RNA を抽出および精製する。エクソソーム RNA は、Clontech 社の SMARTer smRNA-Seq kit for Illumina を用いて、次世代シーケンス用ライブラリーを作成する。作成した次世代シーケンス用ライブラリーは、Bluepippin サイズセレクターを用いて、148 bp ~ 185 bp のマイクロ RNA 画分だけを抽出する。サイズセレクションを行ったエクソソーム RNA の次世代シーケンス用ライブラリーは、KAPA Library Quantification Kit Illumina® Platforms (Nippon Genetics, Japan) または、Qubit dsDNA HS (High Sensitivity) Assay Kit (Life Technologies, CA, USA) によって、濃度測定を行った上で、2.0 pM のライブラリーを、毒性部で所有する Illumina 社 Nextseq500 および国立医薬品食品衛生研究所の共通機器である Illumina 社 Nextseq2000 を用いて、網羅的遺伝子発現解析を行う。

・エクソソーム RNA の RNA-seq データ解析

Illumina 社 Nextseq500 より出力された raw data (raw reads) は、BCL2-FASTQ program (Illumina, USA) により、FASTQ format に変換する。以降、全てのデータ解析は、Galaxy platform (<https://usegalaxy.org>) で行った。FASTQ は、Filter by quality program を用いて、quality score が 20 以上のシーケンスが 90 % 存在するシーケンスのみ解析対象とした。また、5' および 3' 末端のアダプター配列は、Trim FASTQ program によって除いている。

これらの処理を行ったシーケンスデータは、マウスゲノム (mm10) に対し TopHat program を用いてマッピング作業を行い、BAM ファイルを生成した。BAM ファイルは、Cufflinks and Cuffnorm programs を用いて、転写産物の定量化および、サンプル間のノーマライゼーションを行う。

マウス miRNA のリファレンスシーケンスは、miRbase (<http://mirbase.org>) を利用した。

・生化学検査

エクソソーム RNA を毒性指標としたバイオマーカーのバリデーションの一つとして、病理組織学検査に加えて、血清生化学検査を行う。

aspartate aminotransferase (AST) および alanine aminotransferase (ALT) の項目について、automatic blood chemistry analyzer Dry-Chem NX 500V (Fuji Film Co. Ltd, Tokyo, Japan) を利用して測定する。

・遺伝子改変マウスを利用した発生異常および形態形成異常に特異的なバイオマーカーの単離

令和 5 年度に作製した Atp7b 変異マウス (F0 世代) を野生型マウス (C57BL/6J♂または、C57BL/6J♀) と交配を行い、F1 世代マウスの作製を行い、それらの変異を確認することで、変異アレルの germline transmission を確認する。

さらに、germline transmission が確認された変異マウス同士を交配することで、各変異マウスの homo 変異マウスの作製を行い、それぞれのラインの評価を行う。

変異アレルの確認には、下記のプライマーセットを用いてゲノム編集により変異を導入したオンターゲットサイト部位を含む領域を PCR で増幅し、その後、それぞれの F および R のプライマーによるダイレクトシーケンス法により、変異配列を確認する。

Atp7b exon8 変異マウス

Atp7b-exon8 F1: ttagtgactgcccgcctaa
Atp7b-exon8 R1: tcaccagaggctgaggaaga

Atp7b exon11 変異マウス

Atp7b-exon11 F1: ataatgcagcccaggtatgc
Atp7b-exon11 R1: gagtcctcatcacaggttag

ここで得られる F2 世代の homo 変異マウスは、生後 6 ヶ月において、生化学検査およびエクソソーム解析用の血清採取、肝臓および腎臓の毒性評価用の病理学的解析を行う。

・オルガノイドの培養上清中に含まれるエクソソーム RNA をバイオマーカーに用いた代替法の検討

C57BL6/J♂マウス (5 週齢) マウスを解剖し、肝臓を採取する。これらをハサミにて 1mm 角に刻み、PBS

にて洗浄後に collagenase 処理を行う。その後 40 μm セルストレーナーを通し、酵素的および物理的に組織を破碎した後、MBOC (Matrigel Bilayer Organoid Culture) 法を用いて細胞をマトリゲルに包埋し、各臓器毎の至適培地を添加し培養を行った。

樹立に成功した肝臓オルガノイド 1×10^5 個を細胞培養プレートに播種し、5日間培養を行い、四塩化炭素 (0mM、0.3mM、1mM、3mM、10mM) を添加後2日目に培養上清および、肝臓オルガノイドの回収を行った。

回収した培養液上清 (1ml) より、500 μl を使用して、エクソソーム RNA の網羅的遺伝子発現解析を行う。

(倫理面の配慮)

動物実験の計画及び実施に際しては、科学的及び動物愛護的配慮を十分行い、所属の研究機関が定める動物実験に関する規定、指針を遵守した。

C. 研究結果

・オルガノイドの培養上清中に含まれるエクソソーム RNA をバイオマーカーに用いた代替法の検討 (成瀬：R5 年度)

近年開発されたオルガノイド 3D 培養法は、*in vivo* の特性を高度に保存した *in vitro* モデルとなっている。オルガノイドは、臓器を構成する能力を持った未分化な組織幹・前駆細胞が、3D 培養環境の中で、形態形成過程の特徴を模倣してミニ臓器が形成されるものであり、発生期の模倣モデルとして、化学物質や薬物による毒性影響の評価にも適用できるものと考えられる。本研究計画においては、まずは、オルガノイド由来のエクソソームにおいても毒性評価が可能かを明らかにする。

血液中のエクソソーム RNA を毒性指標とした我々の次世代型毒性評価法は、迅速かつ高感度に評価可能な方法になっている。しかしながら、動物愛護の観点から、今後において、動物実験によらない毒性評価が必要となる可能性を考慮し、我々が既に単離している毒性バイオマーカーであるエクソソーム RNA が、オルガノイド 3D 培養上清中に細胞より分泌されるエクソソームにおいても毒性指標となるのかを検討を行う。

R5 年度においては、マウスの肝臓より樹立したオルガノイドに対して、肝臓障害を起こすことが知られる四塩化炭素を添加するべく露実験を行い、細胞の増殖活性、および肝臓の逸脱酵素である AST および ALT の測定を行った。

下図にある様に、樹立に成功した肝臓オルガノイド 1×10^5 個を細胞培養プレートに播種し、5 日間培養を行い、アセトアミノフェン (0mM, 5mM, 10mM, 20mM, 40mM) を添加後 2 日目に培養上清および、肝臓オルガノイドの回収を行った。

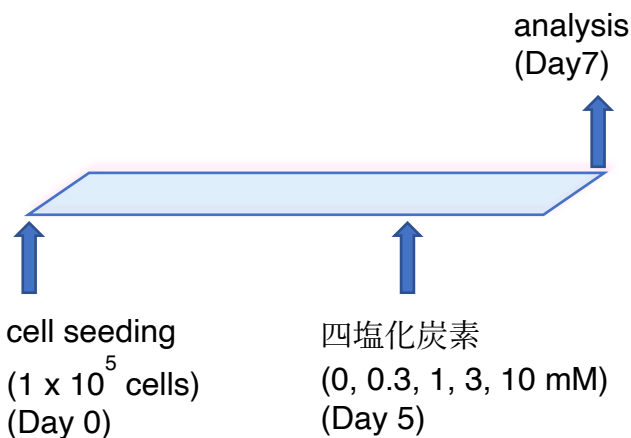


図: C57BL6/Jの肝臓から樹立したオルガノイドに四塩化炭素をばく露および解析する概略図。

肝臓オルガノイドの細胞生存性

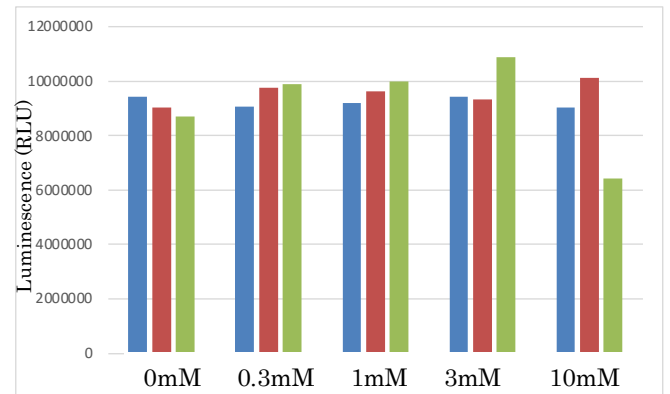


図: C57BL6/Jの肝臓から樹立したオルガノイドに四塩化炭素を0mM, 0.3mM, 1mM, 3mM, 10mMの濃度で添加し、48時間後に細胞生存性の指標として実績の多い還元力を測定している (N=3)。

48時間後においても 10mM 投与群においても細胞の生存性低下は見られなかった。

一方、肝臓障害の指標として利用される血液中の逸脱酵素 (AST および ALT) についても、四塩化炭素添加後 48時間における培養上清において測定したが、溶媒に比較して有意差のある上昇はASTの10mM群だけであった。

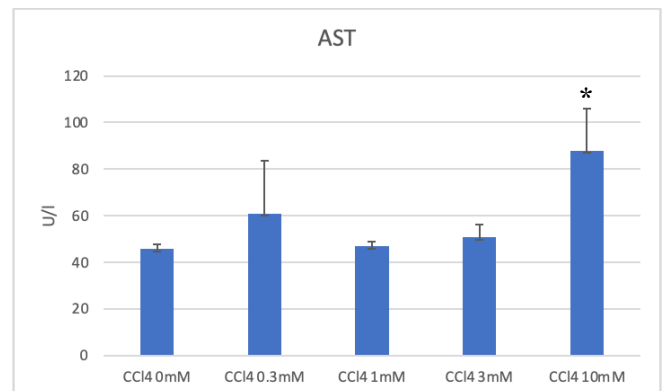


図: C57BL6/Jの肝臓から樹立したオルガノイドに四塩化炭素を0mM, 0.3mM, 1mM, 3mM, 10mMの濃度で添加し、48時間後に細胞培養上清の生化学検査によるAST濃度を測定している (N=3)。* P<0.05

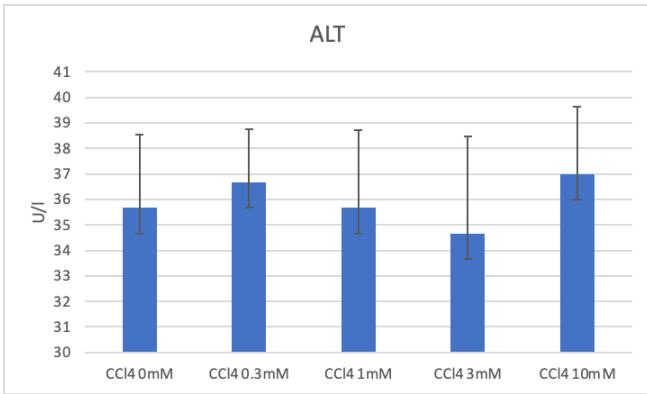


図: C57BL6/Jの肝臓から樹立したオルガノイドに四塩化炭素を0mM, 0.3mM, 1mM, 3mM, 10mMの濃度で添加し、48時間後に細胞培養上清の生化学検査によるALT濃度を測定している (N=3)。

四塩化炭素添加による肝臓オルガノイドへの形態を確認するために、四塩化炭素添加前、および2日後の細胞像の写真撮影を行っている (下図)

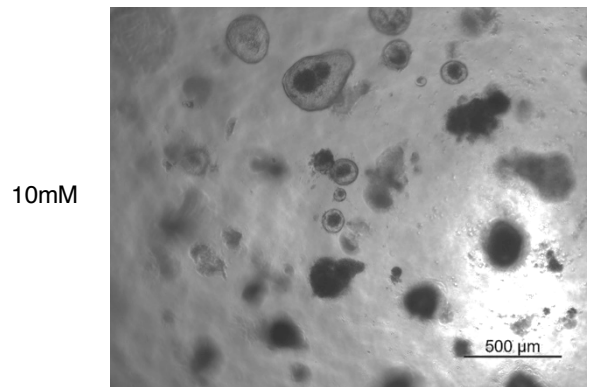
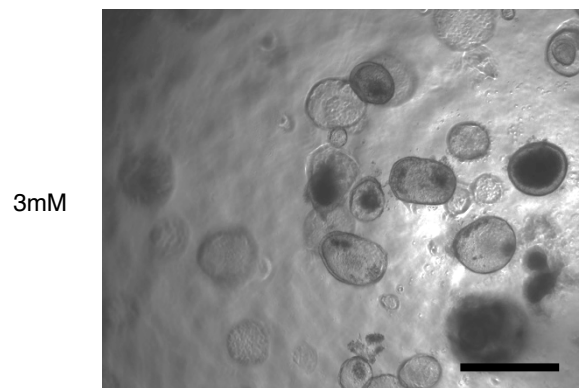
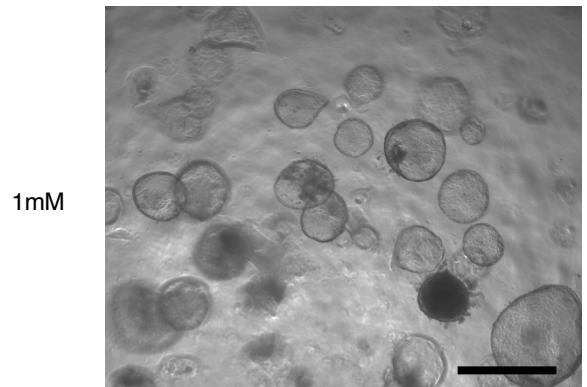
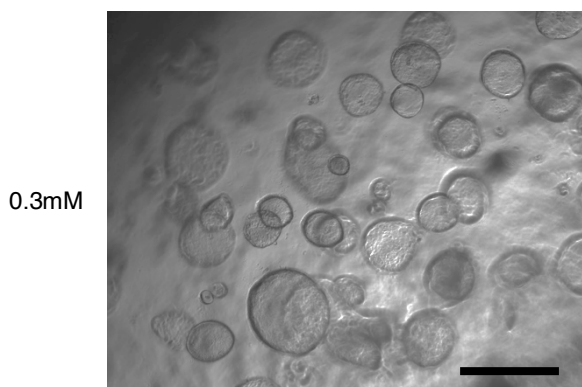
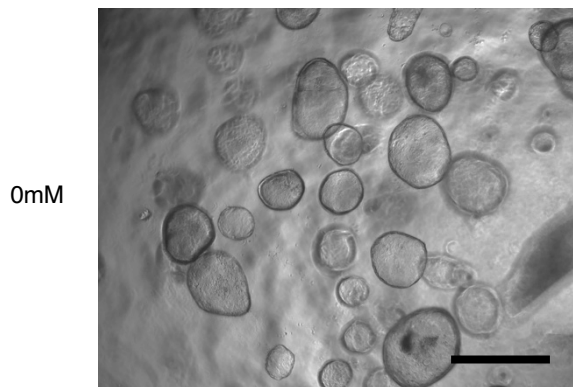
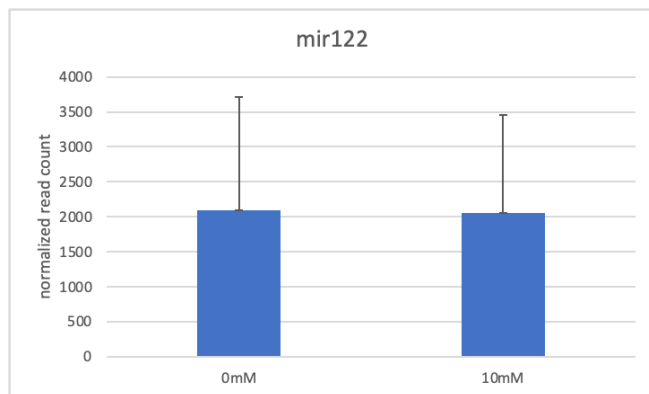


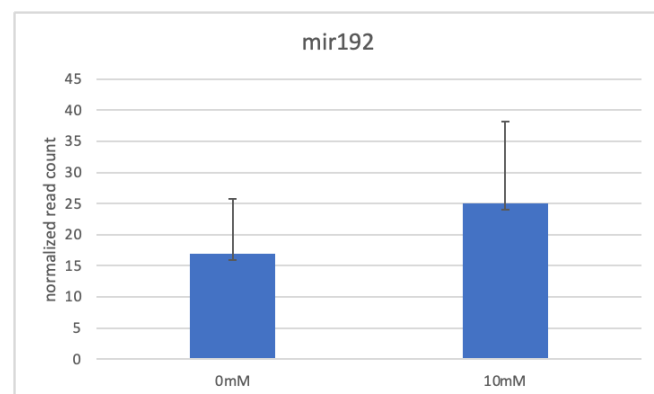
図: C57BL6/Jの肝臓から樹立したオルガノイドに0mM, 0.3mM, 1mM, 3mM, 10mMの濃度で四塩化炭素を添加し、2日目のオルガノイド。(スケールバー=500μm)

R4年度の研究結果より、肝臓オルガノイドは、アセトアミノフェンの添加により、用量依存的に肝臓の逸脱酵素を分泌し、細胞生存性の活性も低下するなど、動物実験と同様の傾向が確認できたが、今年度（R5年度）研究において、四塩化炭素添加においては、用量依存的に、肝臓オルガノイドに細胞死が見られた一方、肝臓オルガノイドの培養上清中の逸脱酵素（ASTおよびALT）においては、生体マウスに四塩化炭素を投与した時と同様の著しい値の上昇は確認できなかった。

また、肝臓オルガノイドの培養上清中のエクソソームRNA解析を行なったところ、肝障害のバイオマーカーであるmiR-122やmiR-192の上昇も確認できなかった。



図：C57BL6/J の肝臓から樹立したオルガノイドに 0mM、10mM の濃度で四塩化炭素を添加し、2日目のオルガノイドにおける 0mM 群と 10mM 群における肝障害のバイオマーカーである miR122 の遺伝子発現量（N=3）。



図：C57BL6/J の肝臓から樹立したオルガノイドに 0mM、10mM の濃度で四塩化炭素を添加し、2日目のオルガノイドにおける 0mM 群と 10mM 群における肝障害のバイオマーカーである miR192 の遺伝子発現量（N=3）。

D. 考察

近年、血液中には、身体中の様々な細胞より分泌される数十から百ナノメータ程度の脂質二重膜の小胞であるエクソソームが存在することが明らかになっている。エクソソームの中に含まれる RNA, DNA, タンパク質には、細胞特異的なものが含まれ、例えば、腫瘍細胞特異的なエクソソームをバイオマーカーとして 90% を超える診断精度が謳われていることから、我々は化学物質による毒性や医薬品の副作用により障害を受けた細胞より特異的なエクソソームが放出されることが明らかにするなど、これらの指標は、発がんや、様々な疾患、毒性などの様々な評価の為の新規バイオマーカーとしての有効である、すなわちリキッドバイオプシーが有効であることを証明してきた。

エクソソームは、あらゆる細胞から体液中に分泌されるものであり、血液中のエクソソームだけでなく、尿中、唾液中のエクソソームをバイオマーカーとした早期発がん診断系の開発が進められている。

また、培養細胞においては、培養上清中へとエクソソームが分泌されることが知られており、培養上清中のエクソソームも発がんや毒性の良い指標となり得ると考えられてきた。

実際は、通常の培養条件においては、培養細胞は *in vivo* の特徴を反映しておらず、その培養上清中のエクソソームは、高度な毒性指標とは成り得ない問題があった。

しかしながら、3D 培養法を利用したオルガノイドは、高度に *in vivo* の特徴を反映しており、その培養上清は、毒性指標としての利用も行える可能性が高かった。

そこで、本分担研究では、オルガノイドの 3D 培養上清中のエクソソーム RNA を毒性指標とした動物実験に依存しない次世代型代替法の開発の可能性を検証することであった。

R3 年度は、C57BL6/J 雄マウス (5 週齢) の解剖を行い、肺、肝臓および大腸を採取し、それらからオルガノイドを樹立することに成功した。

R4 年度は、エクソソーム RNA を毒性指標とした動物実験に依存しないオルガノイド 3D 培養法を利用した次世代型代替法の開発も視野に入れており、昨年度 (令和 3 年度) に樹立することに成功した肝臓オルガノイドに対して、過剰投与により、肝障害を起こすことが知られるアセトアミノフェンをばく露し、肝障害が実験動物と同様に肝障害を起こし得るのかの検証を行った。

アセトアミノフェンの濃度依存的に、肝臓オルガノイドの細胞生存性が低下した。さらに、肝臓オルガノイドを培養していた培養上清を利用して、生化学検査を行ったところ、肝臓の逸脱酵素として知られる AST, ALT の上昇が観察された。

R5 年度は、肝臓オルガノイドに対して、四塩化炭素 (0mM、0.3mM、1mM、3mM、10mM) の添加実験を行い、容量依存的に、肝臓オルガノイドに細胞死が見られた一方、肝臓オルガノイドの培養上清中の逸脱酵素 (AST および ALT) においては、生体マウスに四塩化炭素を投与した時と同様の著しい値の上昇は確認できなかった。

E. 結論

近年開発されたオルガノイド 3D 培養法は、*in vivo* の特性を高度に保存した *in vitro* モデルとなっている。オルガノイドは、臓器を構成する能力を持った未分化な組織幹・前駆細胞が、3D 培養環境の中で、形態形成過程の特徴を模倣してミニ臓器が形成されるものであり、発生期の模倣モデルとして、化学物質や薬物による毒性影響の評価にも適用できるものと考えられる。

そこで、令和 3、4 年度においてオルガノイド 3D 培養法を利用した代替法の検討のために、マウスの肝臓より樹立に成功したオルガノイドに対して、過剰投与により肝臓障害を起こすことが知られるアセトアミノフェンを添加した。

その培養上清中には、アセトアミノフェンの濃度依存的に肝臓オルガノイドより逸脱酵素が分泌され、細胞生存性が低下するなど、*in vivo* の挙動に近い特徴を明らかにした。

今年度 (令和 5 年度 : 3 年計画の 3 年目) の研究では、肝臓オルガノイドを細胞培養プレートに播種し、5 日間培養した後、肝毒性モデル物質である四塩化炭素 (0mM、0.3mM、1mM、3mM、10mM) を添加した。四塩化炭素添加後の 2 日目に培養上清と肝臓オルガノイドを回収した。

用量依存的に、肝臓オルガノイドに細胞死が見られた一方、肝臓オルガノイドの培養上清中の逸脱酵素 (AST および ALT) においては、生体マウスに四塩化炭素を投与した時と同様の著しい値の上昇は確認できなかった。また、肝臓オルガノイドの培養上清中のエクソソーム RNA 解析を行なったところ、肝障害のバイオマーカーである miR-122 や miR-192 の上昇

も確認できなかった。

これは、肝毒性の発現以前に、培養系における細胞毒性を生じてしまい、生体とは違うメカニズムで細胞の生存障害が起こっているものと考えられる。

動物実験代替法は推進すべき課題であるが、本当に生体を反映しているかの評価が難しい問題である。本研究で開発に成功した母動物の血清および胎児羊水中のエクソソーム RNA を毒性指標とする次世代型毒性評価法は、動物実験における使用匹数の大幅な削減に貢献するだけでなく、オルガノイドなどの培養系における *in vivo* を反映しているのかという鋭敏な指標にもなりうると考えられる。

本研究を推進することで、エクソソーム RNA を指標としたリスク評価により、常に一定の判断基準による評価が可能な次世代型催奇形性評価法を開発すると同時に、生殖発生毒性のメカニズムの解明にも繋げられると考えられ、厚生労働行政に貢献しうる研究開発となっている。

F. 研究発表

1. 論文発表

(令和 5 年度)

< 論文・著書 >

- 1) ○* Ryuichi Ono, Makiko Kuwagata, Mie Naruse, Akihito Watanabe, Masao Takano, Takuro Hasegawa, Hiromasa Takashima, Yusuke Yoshioka, Takahiro Ochiya, Yoko Hirabayashi, and Satoshi Kitajima. Extracellular Vesicle Small RNAs Secreted from Mouse Amniotic Fluid Induced by Repeated Oral Administration of VPA to Pregnant Mice *Fundamental Toxicological Sciences*, 11, 37-56 (2024) * Corresponding author
- 2) ○Kuwagata M., Tsuboi M, Igarashi T, Tsurumoto M, Nishimura T, Taquahashi Y, Kitajima S: A 90-day dose Toxicity Study of 2-(2H-benzotriazol-2-yl)-6-dodecyl-4-methylphenol in Rats. *Fundam Toxicol Sci*, 10, 59-68 (2023).
- 3) ○Kuwagata M., Tsuboi M, Igarashi T, Tsurumoto M, Nishimura T, Taquahashi Y, Kitajima S: A 90-day repeated oral dose toxicity study of 2-Butylbenzo[d]isothiazol-3(2H)-one in Rats. *Fundam Toxicol Sci*, 10, 69-82 (2023).
- 4) Ishino, F., Itoh J., Irie M., Matsuzawa A., Naruse M., Suzuki T., Hiraoka Y., Kaneko-Ishino T.: Retrovirus-Derived RTL9 Plays an Important Role in Innate Antifungal Immunity in the Eutherian Brain. *Int J Mol Sci*. 24(19) 14884 (2023)
- 5) Imai T., Naruse M., Machida Y., Fujii G., Mutoh M., Ochiai M., Takahashi M., Nakagama H. : Feeding a High-Fat Diet for a Limited Duration Increases Cancer Incidence in a Breast Cancer Model. *Nutr Cancer* 75(2): 713-725 (2023)
- 6) Noda T, Shinohara H, Kobayashi S, Taira A, Oura S, Duritahala, Tokuyasu M, Araki K, Ikawa M.: Multiple genes in the Pate5-13 genomic region contribute to ADAM3 processing. *Biol Reprod*. 2024 Jan 13:ioae008.
- 7) Endo T, Kobayashi K, Matsumura T, Emori C, Ozawa M, Kawamoto S, Okuzaki D, Shimada K, Miyata H, Shimada K, Kodani M, Ishikawa-Yamauchi Y, Motooka D, Hara E, Ikawa M.: Multiple ageing effects on testicular/epididymal germ cells lead to decreased male fertility in mice. *Commun Biol*. 2024 Jan 4;7(1):16.
- 8) Miyake T, Inoue Y, Shao X, Seta T, Aoki Y, Nguyen Pham KT, Shichino Y, Sasaki J, Sasaki T, Ikawa M., Yamaguchi Y, Okamura H, Iwasaki S, Doi M.: Minimal upstream open reading frame of Per2 mediates phase fitness of the circadian clock to day/night physiological body temperature rhythm. *Cell Rep*. 2023 Mar 28;42(3):112157.
- 9) Shimada K, Park S, Oura S, Noda T, Morohoshi A, Matzuk MM, Ikawa M.: TSKS localizes to nuage in spermatids and regulates cytoplasmic elimination during spermiation. *Proc Natl Acad Sci U S A*. 2023 Mar 14;120(11):e2221762120.
- 10) Lu Y, Shimada K, Tang S, Zhang J, Ogawa Y, Noda T, Shibuya H, Ikawa M.: 1700029I15Rik orchestrates the biosynthesis of acrosomal membrane proteins required for sperm-egg interaction. *Proc Natl Acad Sci U S A*. 2023 Feb 21;120(8):e2207263120.
- 11) Ito K, Yamamoto T, Hayashi Y, Sato S, Nakayama J, Urabe F, Shimasaki T, Nakamura E, Matui Y, Fujimoto H, Kimura T, Egawa S, Ochiya T., Yamamoto Y. Osteoblast-derived extracellular vesicles exert osteoblastic and tumor-suppressive functions via SERPINA3 and LCN2 in prostate cancer. *Mol Oncol*. 2023 Oct;17(10):2147-2167. doi: 10.1002/1878-0261.13484. Epub 2023 Aug 4. PMID:37408474; PMCID: PMC10552899.
- 12) Minami S, Chikazu D, Ochiya T., Yoshioka Y. Extracellular vesicle-based liquid biopsies in cancer: Future biomarkers for oral cancer. *Transl Oncol*. 2023 Sep 13;38:101786. doi: 10.1016/j.tranon.2023.101786. Epub ahead of print. PMID:37713973; PMCID: PMC10509717.
- 13) Yokoi A, Ukai M, Yasui T, Inokuma Y, Hyeon-Deuk K, Matsuzaki J, Yoshida K, Kitagawa M, Chattrairat K, Iida M, Shimada T, Manabe Y, Chang IY, Asano-Inami E, Koya Y, Nawa A, Nakamura K, Kiyono T, Kato T, Hirakawa A, Yoshioka Y, Ochiya T., Hasegawa T, Baba Y, Yamamoto Y, Kajiyama H. Identifying high-grade serous ovarian carcinoma-specific extracellular vesicles by polyketone-coated nanowires. *Sci Adv*. 2023 Jul 7;9(27):eade6958. doi: 10.1126/sciadv.ade6958. Epub 2023 Jul 7. PMID: 37418532; PMCID: PMC10328412.

- 14) Hanai H, Hart DA, Jacob G, Shimomura K, Ando W, Yoshioka Y, Ochiya T, Nakagawa S, Nakamura M, Okada S, Nakamura N. Small extracellular vesicles derived from human adipose-derived mesenchymal stromal cells cultured in a new chemically-defined contaminate-free media exhibit enhanced biological and therapeutic effects on human chondrocytes in vitro and in a mouse osteoarthritis model. *J Extracell Vesicles*. 2023 Jul;12(7):e12337. doi: 10.1002/jev2.12337. PMID: 37367299; PMCID: PMC10295161.
- 15) Morimoto M, Maishi N, Tsumita T, Alam MT, Kikuchi H, Hida Y, Yoshioka Y, Ochiya T, Annan DA, Takeda R, Kitagawa Y, Hida K. miR-1246 in tumor extracellular vesicles promotes metastasis via increased tumor cell adhesion and endothelial cell barrier destruction. *Front Oncol*. 2023 Apr 12;13:973871. doi: 10.3389/fonc.2023.973871. PMID: 37124539; PMCID: PMC10130374.
- 16) Okamura A, Yoshioka Y, Saito Y, Ochiya T. Can Extracellular Vesicles as Drug Delivery Systems Be a Game Changer in Cardiac Disease? *Pharm Res*. 2023 Apr;40(4):889-908. doi: 10.1007/s11095-022-03463-z. Epub 2022 Dec 28. PMID:36577860; PMCID: PMC10126064.
- 17) Shimada Y, Yoshioka Y, Kudo Y, Mimae T, Miyata Y, Adachi H, Ito H, Okada M, Ohira T, Matsubayashi J, Ochiya T, Ikeda N. Extracellular vesicle-associated microRNA signatures related to lymphovascular invasion in early-stage lung adenocarcinoma. *Sci Rep*. 2023 Mar 24;13(1):4823. doi:10.1038/s41598-023-32041-5. PMID: 36964242; PMCID: PMC10038982.
- 18) Tashiro K, Yoshioka Y, Ochiya T. Extracellular vesicles from adipose-derived stem cells relieve extremity lymphedema in mouse models. *Plast Reconstr Surg*. 2023 Mar 8. doi: 10.1097/PRS.0000000000010388. Epub ahead of print. PMID:36877751.
- 19) Lischnig A, Bergqvist M, Ochiya T, Lässer C. Corrigendum for "Quantitative Proteomics Identifies Proteins Enriched in Large and Small Extracellular Vesicles". *Mol Cell Proteomics*. 2023 Mar;22(3):100516. doi:10.1016/j.mcpro.2023.100516. Epub 2023 Mar 10. Erratum for: *Mol Cell Proteomics*. 2022 Sep;21(9):100273. PMID: 36907076; PMCID: PMC10024162.
- 20) Urabe F, Kosaka N, Yamamoto Y, Ito K, Otsuka K, Soekmadji C, Egawa S, Kimura T, Ochiya T. Metastatic prostate cancer-derived extracellular vesicles facilitate osteoclastogenesis by transferring the CDCP1 protein. *J Extracell Vesicles*. 2023 Mar;12(3):e12312. doi: 10.1002/jev2.12312. PMID: 36880252; PMCID:PMC9989745.
- 21) Kiya Y, Yoshioka Y, Nagakawa Y, Ochiya T. Extracellular Vesicles Are Important Mediators That Regulate Tumor Lymph Node Metastasis via the Immune System. *Int J Mol Sci*. 2023 Jan 10;24(2):1362. doi: 10.3390/ijms24021362. PMID:36674900; PMCID: PMC9865533.
- 22) Suzuki K, Yokoi A, Yoshida K, Kato T, Ochiya T, Yamamoto Y, Kajiyama H. Preoperative serum microRNAs as potential prognostic biomarkers in ovarian clear cell carcinoma. *J Gynecol Oncol*. 2022 Dec 23. doi: 10.3802/jgo.2023.34.e34. Epub ahead of print. PMID: 36603851.
- 23) 小島肇, 平林容子. 創薬開発に期待される New Approach Method の行政的な受け入れについて *日薬理誌 (Folia Pharmacol. Jpn.)* 158, 269-272, 2023, doi: 10.1254/fpj.22154.
- 24) J. Strickland, E. Haugabrooks, D.G. Allen, L.B. Balottin, Y. Hirabayashi, N.C. Kleinstreuer, H. Kojima, C. Nishizawa, P. Prieto, D.E. Ratzlaff, J. Jeong, J. Lee, Y. Yang, P. Lin, K. Sullivan, W. Casey, International regulatory uses of acute systemic toxicity data and integration of new approach methodologies. *Crit Rev Toxicol*. 2023), 1-27, doi: 10.1080/10408444.2023.2240852.

2. 学会発表 (令和5年度)

○小野 竜一、cfDNA メチル化とエクソソーム RNA を毒性指標としたリキッドバイオプシー、第50回日本毒性学会学術年会 2023.6.21 横浜

小野 竜一、エクソソームを介した遺伝子水平伝搬、第50回日本毒性学会学術年会 2023.6.22 横浜

○Ryuichi Ono、Liquid biopsy using cfDNA methylation and EV-associated miRNA as a toxicity biomarker、The 10th International Congress of Asian Society of Toxicology, 2023.7.19, Taipei (招待講演)

○Ryuichi Ono、Extracellular Vesicles (EVs) as Novel Toxicity Biomarkers、The 10th 63RD ANNUAL MEETING of Society of Toxicology, 2024.3.14, Salt Lake City (招待講演)

桑形麻樹子、高島 宏昌、長谷川拓郎、田中加奈子、羽田 亮、山崎 浩史、北嶋 聡、ウサギへのサリドマイド経口投与による精漿を介する発生毒性発現リスクの解明、第63回日本先天異常学会学術集会、筑波、2023年7月29日、ポスター

Toshime Igarashi1, Mari Matsumura, Izumi Ogawa, Chiori Yakawa, Takahiko Hayakawa, Miyoko Ochi, Hirokatsu Saito, Takuya Nishimura, Makiko Kuwagata, Satoshi Kitajima, Recent trends in regulatory systems in other countries regarding the safety assurance of new food products including so-called cultured meat 10th International Congress of Asian Society of Toxicology, Taiwan on 17 – 20 July 2023.

Makiko Kuwagata, Hiromasa Takashima, Ryo Haneda, Kanako Tanaka, Takuro Hasegawa, Hi-roshi Yamazaki,

Satoshi Kitajima: Possible ter-atogenic effects mediated by seminal plasma ex-posed to thalidomide in rabbits. EUROTOX2023. (2023.9.10-13)リュブリャナ、スロベニア

長谷川拓郎、白方渉太、高島 宏昌、山崎 浩史、北嶋聡、桑形麻樹子: LC-MS/MS を用いたウサギ血漿、精液および子宮内容物中のサリドマイドとその代謝物の同時測定法のバリデーション. 第 50 回日本毒性学会学術年会(2023.6.19-21) 横浜

高島宏昌、田中加奈子、長谷川拓郎、羽田亮、山崎浩史、北嶋聡、桑形麻樹子: ウサギを用いたサリドマイド腔内投与による催奇形作用評価. 第 50 回日本毒性学会学術年会(2023.6.19-21) 横浜

○桑形麻樹子: 新生 DNT 委員会のこれから. 第 63 回日本先天異常学会学術集会(2023.7.28) つくば

桑形麻樹子、高島宏昌、長谷川拓郎、田中加奈子、羽田亮、山崎浩史、北嶋聡: ウサギへのサリドマイド経口投与による精漿を介する発生毒性発現リスクの解明. 第 63 回日本先天異常学会学術集会(2023.7.28-30) つくば

桑形麻樹子: ウサギ精漿を介したサリドマイドによる発生毒性のリスク
第 97 回日本薬理学会年会(2023.12.14)神戸

Mie Naruse, Hiroe Nozaki, Toshio Imai, Kassai Hidetoshi, Ryuichi Ono; Faithful DNA methylation status of imprinted DMRs in colon-derived organoids. 第 50 回日本毒性学会学術年会 (2023.6.横浜)

Mie Naruse; Analysis using organoids derived from colorectal cancer patients and paired CAFs. The 10th International Congress of Asian Society of Toxicology (2023.7. Taiwan)

成瀬美衣、関根茂樹、野崎弘枝、葛西秀俊、今井俊夫; 大腸癌手術余剰検体由来のオルガノイドおよび CAF を用いたエピゲノムマーカーの探索. 第 82 回日本癌学会学術集会 (2023.9.横浜)

成瀬美衣、関根茂樹、野崎弘枝、今井俊夫、葛西秀俊; 大腸がんにおけるがん-間質細胞相互作用を再現する in vitro 実験系の構築. 第 46 回日本分子生物学会年会 (2023.12.神戸)

成瀬美衣、関根茂樹、野崎弘枝、今井俊夫、葛西秀俊; 大腸がん患者由来オルガノイドと同一症例由来線維芽細胞の共培養系を用いる評価系の確立. 日本薬学会 144 年会(2024.3.横浜)

G. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得 なし。

2. 実用新案登録
なし。
3. その他
なし。